

ハイマート Heimat

ぐんま日独協会 会報

2018年8月10日

52号

発行者 鈴木 克彬

発行所 ぐんま日独協会

〒371-0105

群馬県前橋市富士見町石井 2445-219

電話 : 027-288-4297

E-mail : info@jdg-gunma.jp

ホームページ : <http://www.jdg-gunma.jp/>

ホームページの右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。



【ライプツィヒにある Runde Ecke - 1950~1989 ” Stasi “ シュタージ の県本部】

1. 会長のことば	2
2. 寺澤行忠先生講演会要旨	3~4
3. ライプツィヒ” Runde Ecke” 博物館	5~7
4. ドイツ炭鉱派遣の思い出 (連載-4)	8~10
5. 日本百名山 - 独訳 (連載-3)	10~12
6. デザイナー修行奮闘記 (連載-12)	12~14
7. ドイツ音楽サロン	15
8. 新規活動サークル紹介	16

1. 会長挨拶

『楽しかった・勉強になった』と思われる行事を

・・・継続性・参加者増を図るために・・・ 会長 鈴木克彬

江戸時代、石門心学という学問が盛んでした。その師石田梅岩の教えは、士農工商という身分制度から商人が低く見られた世相に対し、『商人は商品売って、相手に満足と喜びを提供するのだから、その対価・儲けは受ける権利があり、その知恵・努力は当然認めるべきである』というものでした。現代でいう『ウイン・ウインの精神』です。

この世の中、義理とか無理が強い集まりは長続きしないと思います。参加者に『楽しかった！また来たい』と思われるようなメニューの提供と継続性のある企画が必要だと思います。私達協会の行事もこのウイン・ウイン精神でなければと考えています。

ぐんま日独協会は、協会員140名を擁し、本年お陰様で創立30周年を迎えることが出来ました。これは現会員の尽力はもとより、先輩方・関係各位のご指導・ご示唆のお蔭と、ここに改めて感謝申し上げます。

平成17年(2005年)日本におけるドイツ年を記念してスタートした“ドイツフェスティバル in ぐんま”も県庁ホールを会場とし、昨年1万5千名の来場者を得て、第7回(隔年開催)を盛大に開催することが出来ました。また平成18年(2006年)第一土曜日からスタートしたドイツサロンは、毎月、高崎にドイツ人をお迎えし好評、毎回30名程度の参加があり、遂に延べ120回を超えました。これは、やはり毎回テーマを決め、日独両者の発表・質問や意見交流を通して、楽しい学習機会が生まれている成果だと思います。

昨年度から「ドイツ語ニュースを聞く会」、「ドイツ映画を見る会」等も前橋市の公民館視聴覚室等をお借りして定期的開催を始めています。また昨年、ぬいぐるみの「クマさん作り」もスタートしました。

日本とドイツ、ともに時間・約束を守る、真面目な両国だと思います。ドイツファンが一人でも多くなるよう、今後とも間口を広げ頑張っていきたいと考えています。皆様のご支援をお願い致します。

2. 寺澤行忠先生講演会要旨

2018年4月29日（日）、寺澤行忠先生（慶応義塾大学名誉教授、横浜日独協会理事）を前橋にお迎えして『ドイツに渡った日本文化』と題して一般公開の講演会を開催しました。



***** 講演要旨 *****

●第二次世界大戦までの日独交流

江戸時代にはケンペルやシーボルトが著名だが、明治以降で群馬に関係が深い人物としてブルーノ・タウトがいる。

演劇方面では、川上音二郎・貞奴夫妻が西洋に大きな影響を与えた。アンドレ・ジッドやパブロ・ピカソも貞奴の演技を絶賛した。

●現代文化

ドイツにはもともと、独自のマンガ文化、コミック文化はなかった。戦後しばらくするとフランス、ベルギー、アメリカなどからマンガ・コミックの作品が入ってきて大人世代の評価も変わってきた。そこへ日本のマンガ『アキラ』が1991年にドイツで翻訳・出版され、大きな衝撃を与え、さらに1998年には『ドラゴンボール』と『美少女戦士セーラームーン』によりマンガブームを引き起こした。ドイツではマンガも他の書物と同様左開きだったが、そうするには日本マンガの画像を反転して配置を変えて印刷する必要があり、費用がかさむことから日本のマンガと同じように右開きに変えた。その他、食文化や和太鼓なども人気を博している。

●伝統文化

茶道、生け花、舞台芸術としての能、狂言、歌舞伎、文楽、また日本庭園と盆栽も大変人気がある。ただし、歌舞伎の海外公演は、多大な費用がかかること

からバブル崩壊およびリーマンショック後は企業の協賛金が期待できなくなり、ドイツでの公演がほとんど行われなくなったことは悲しい。文楽の海外公演では字幕の使用が必須であるが、これにより理解を助けている。

●日本美術

18世紀の初めには伊万里焼などの大量の陶磁器がヨーロッパに渡り、それらはオランダの商人を通してドイツの王侯貴族などに買われ、邸宅の重要な部屋の装飾に使われた。ドイツ各地には現在多数の日本美術作品のコレクションがある。群馬に関係の深いエルヴィン・ベルツの約6,000点に及ぶコレクションがあるリンデン民族学博物館もその一つである。

●俳句

俳句は20世紀に入る頃から海外に紹介された。ヨーロッパに紹介された当初は、17音という短い韻文では詩の名に値しない、とされた。西洋に俳句が普及する上で大きな役割を果たしたのはフランス人ポール・ルイ・クーシューであった。俳句は現在およそ50か国でそれぞれの言語でつくられている。

この講演は寺澤先生の近著『ドイツに渡った日本文化』を骨子にしており、本の内容の背景などを掘り下げてお話しいただき、大変好評を博しました。

ぐんま日独協会では毎月第1土曜日に東京からドイツ人研修生を迎えて「ドイツサロン」を開いています。研修生に日本に興味を持つようになったきっかけを聞くと9割の人が「漫画・アニメ」と回答します。最初のころは大変奇異に、そして不思議に感じられましたが、最近では「そういうものだ」と妙に理解した積りになっていましたが、講演を聞いて「なるほど」と完全に理解できたと思えるようになりました。



時間の関係で講演の中では聞くことができませんでしたが、ドイツとアメリカでの日本研究に関して大きな相違点は、アメリカ（他の国も含めて）では、経済なら経済、芸術なら芸術という分野ごとに「日本研究」をするのに対して、ドイツにはすべての分野を含めて”Japanologie”（「日本学」）という学問があるということです。このあたりの事情についても機会があれば是非お話を伺いたいと思いました。

3. 旧国家公安省（シュタージ）資料館 "Runde Ecke" （宮越 リカ 記）

いまから 5 年ほど前、ライプツィヒにあるシュタージ資料館を訪れ、入る前と後では考え方が大きく変わったといえるほどの衝撃を受けました。ぜひ多くの方にその存在と内容を知っていただきたいと思います。



<シュタージとは> その資料館は、**Runde Ecke**（丸い角）と呼ばれる建物の中にあります。1950～1989 年の 40 年間にわたり、東ドイツ国家公安省（ドイツ語で **Ministerium für Staatssicherheit**、略して **Stasi** シュタージ）のライプツィヒ県本部が置かれていました。シュタージは、ナチ時代のゲシュタポやソ連の KGB をしのぐ、世界最強と言われた組織で、外国に対するスパイ活動だけではなく、自国民に対する監視を任務とした諜報機関です。人口 1 万人あたり 55 人の正規職員に加えて、115 人の「非公式協力者」が、全国に監視と密告の網を張りめぐらせ、反体制運動を弾圧し、社会主義統一党の独裁を支えていました（ちなみに、現在の日本の警察官は、人口 1 万人あたり 22 人）。

「非公式協力者」というのは、職場や学校、地域や教会の仲間、あるいは友人や家族、つまり身近な人について情報を提供したり、工作をしたりする人のことです。自分の信念から、あるいはなんらかの優遇を期待して協力した人もいましたが、中には強制されてやむを得ず協力した人もいました。生活のあらゆる場面に「協力者」は送り込まれていました。また、警察はもとより、公的機関、会社、学校、その他の機関もシュタージに協力して情報を提供する体制ができあがっていたのです。

監視の対象となったのは、党や政権に対して批判的な意見をもつ市民、出国希望者、反体制的な芸術家、教会関係者、人権運動や平和活動家など「敵対的否定的勢力」と呼ばれる人物やグループですが、積極的な活動家でなくても、ちょっと批判的なことを口にしただけでも密告されかねませんでした。

反体制派の弾圧といっても、1960 年代以降は、国際的な評価を気にして逮捕などはせず、かわりにもっと手の込んだ巧妙な心理作戦が行われるようになりました。

「分解、崩壊」という意味の **Zersetzung** という名称で呼ばれた一連の工作がおこなわれました。対象人物についてあることないことを噂に流して社会的信用を失墜させたり、夫婦間の不仲を引き起こしたり、職業上失敗するように仕組んだりして自信を喪失させ、精神的にぼろぼろにして、反体制活動などする余裕をなくさせてしまう。またグループの場合は、中に協力者を送り込み、不信や妬み猜疑心をおこすような工作をして、仲間割れをさせました。こうして運動を崩壊させたのです。

このような手口の被害者の推定数は、千あるいは万の桁に及ぶといわれ、回復不能な精神障害を被った被害者が5,000人はいるとのこと。

<1989年 平和革命>

1989年11月9日、ベルリンの壁が崩壊したニュースをよく覚えていらっしゃる方も多いことと思います。東ドイツは、東欧諸国の中でも最後まで頑固に社会主義体制を維持しようとしていましたが、この年の秋には、全国各地で体制変換と民主化を求める反対運動がおこり、大混乱になっていました。特にライプツィヒでは市民運動が大きく盛り上がり1989年秋には、数万人もの一般市民が通りに出て反対運動に参加したのです。当局は武力による制圧の準備もしていましたが、結局、市民の安全を確保することを選び、衝突は避けられました。「平和革命」と呼ばれる所以です。

<資料館のなりたち>

このようにいつ政権が倒れるかもしれないという緊迫した状況の中で、シュタージの職員は、それまでの諜報活動で集めに集めた膨大な資料の破棄を始めていました。これが公になると、シュタージが誰に対して何をしていたのかが明るみになってしまうからです。当時はまだ紙資料の時代。書類と水を混ぜてコンクリートミキサーのような機械にかけ、水を切ったものを運び出して処分していましたが、間に合わなくなって手で破って袋詰めにしたものもありました。一方、シュタージが証拠隠滅を始めたを知った市民側は、これを阻止するために「ライプツィヒ市民委員会」という組織をつくり、実力行使に出ます。そして建物を占拠して、この作業を止めることに成功したのです。

このときに **Runde Ecke** を占拠した市民委員会が、建物をそのまま利用して資料館をつくりました。特に、当時のことを知らない世代に、シュタージがどういう組織で、どういう方法で何をしていたのか、それが市民の人権をどのように奪っていたのかを具体的に知ってもらい、独裁政権の怖さ、平和革命の意義と民主主義の大切さを認識してもらうことを使命としています。シュタージが使った道具類の展示のほか、破棄を免れた書類の保管管理、弾圧被害者へのカウンセリング、講演会などの教育活動もしています。費用はドイツ連邦政府、ザクセン州、ライプツィヒ市、その他公的資金と寄付で賄われています。

<常設展とデータベース>

館内は、シュタージ職員が働いていた当時の簡素な空間がそのまま残されています。展示ケースには、たとえば変装用品（カツラ、付け髭、メガネ、郵便局員の制服等々）、各種隠し撮り用カメラ、住居侵入のための道具（合鍵を作る型、侵入時の部屋の様子を退出時に再現するための現場写真を撮るポラロイドカメラ等）、郵便検閲用具（次ページの写真）などが並び、その横には、実際の監視場所であった場所を示す地図がある。監視が具体的にどのようにおこなわれていたのかが、その

現場を訪れた者に生々しく伝わってきます。4万点におよぶ収蔵品は、常設展示以外に、3,000点が非常に詳しい説明と画像をつけてデータベース化され、インターネットで一般公開されています。<http://www.runde-ecke-leipzig.de/>



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:GDR_Stasi_Dep_M_2.jpg
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:GDR_Stasi_Dep_M_4.jpg

【検閲のため、蒸気で封書の糊を剥がす機械 (左上) と再び糊付けする機械 (右上)】

https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/7/70/GDR_Stasi_Postmark.jpg/1024px-GDR_Stasi_Postmark.jpg

【手紙を偽装するための消印セット。西側の都市も含むさまざまな地名がある。監視対象者を誘導する目的で使われた】



【中に仕込んだ反射鏡によって、向けた方向と別方向のものをこっそり撮影できるレンズ】

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:GDR_Stasi_Objektiv.jpg

「このカメラで盗撮され、このマイクで盗聴され、この機械で手紙を検閲される監視社会」が、自分が訪れている美しいライプツィヒの街にわずか25年前に存在したという事実は衝撃でした。Runde Eckeを出たときには「東独の監視社会のようなものはもう二度とないだろう」というそれまでの根拠のない安心は、「二度と許してはならない」という考えに変わっていました。ライプツィヒ市民委員会の目的は十分に果たせたといえるでしょう。

<おわりに>

1989年秋、ライプツィヒと同じようなことが東ドイツ各地のシュタージ本部でも起こりました。その結果、東ドイツ全体で、書架として並べると111kmに及ぶという膨大な量の文書をはじめ、写真、ビデオ、カセットテープ等々、そして破かれた書類が入った袋15000袋が破棄を免れて市民の手に渡りました。「シュタージ文書」と呼ばれるこれらの資料は、諜報機関の実態を伝える、他に例を見ない資料です。シュタージ文書法という法律のもと、これを保全、整理し、監視対象となった人々の名誉回復や賠償などのために情報提供をおこなう目的で、国の公的機関がつけられました。その機関の職員数は1600名、年間予算は1億230万ユーロ(2012年)です。また、ベルリンとドレスデンにもシュタージ関連の資料館があり、ライプツィヒと同様に当時の監視社会の実態について後世の人々に伝えています。

自国の「負の遺産」に正面から向き合い、間違ったことを繰り返さないために市民に生の情報を提供し、教育するドイツの姿勢には大いに学ぶべきところがあると思います。

4. ドイツ炭鉱派遣の思い出 - その4 (對馬 良一 記)

ドイツに派遣された翌年、1959年3月27日～4月5日までドルトムントの、ウェストファーレンホール (Westfalenhalle) で第25回世界卓球選手権大会があった。私たちは連日、日本選手団の応援に出かけた。日本、韓国、中国のペンホールダーとヨーロッパのシェークハンドの戦いだったが、当時はペンホールダーが優勢だった。男子個人が中国の容国团選手だったが、日本は7種目中6種目の優勝でした。男子は、荻村、星野、村上、成田、女子は松崎、江口、難波、山泉の各選手の大活躍で、特に団体戦の準決勝の荻村選手とハンガリーのシド選手の試合は今でも目に浮かびます。大柄のシド選手に、体格だけで見ると大人と子供の試合みたいだった。選手たちは私たちが握ったおにぎりを食べ、元気が出たと喜んでくれた。私が下宿し始めたのも卓球が縁でした。



【世界卓球選手権大会の日本選手団】



【荻村選手 (中央) と】

私達の炭鉱ウンザー・フリッツ鉱の卓球クラブの会員が見学に来ていた。クラブ書記をしていたボルフカンク・ポンペ氏と仲良くなりウンザー・フリッツ鉱のシュバーツ・ヴァイス・ウンザーフリッツ (Schwarz-Wieß-UnserFriz) スポーツクラブに入会した。そして彼の家に下宿をすることになった。



【ウンザー・フリッツ鉱の卓球クラブにて】

勤務の帰りや、出勤まえの時間にドイツ人と卓球をして楽しんだ。毎週のように他のクラブとの対抗試合があり、帰国するまでスポーツクラブの一員として各地に旅行もできた。一度だけ東ベルリンでの交流試合にいったことがある。まだ、ベルリンの壁はなかったがカメラは持って行かないほうがいい、パスポートは肌身はなさないように」と注意を受けながら、東ベルリンのビアホールで試合をして負けた記憶がある。日本人に勝ったと相手の選手からビールをご馳走になったが、東ベルリンのどこ場所だったか覚えていない。

帰国するときクラブで送別会を開いてくれた。このとき私は、このクラブに「對馬杯」の盾を贈呈してきた。毎年クラブの最優秀選手にと……。帰国後も何度か、今年は誰が「對馬杯」を獲得したと報告がきていた。



【對馬杯を手にしたゲルダ夫人と仲間たち】

数年後、クラブの会長からの手紙で、今度入会した日本の選手はすごく上手でクラブの選手が歯立たない、對馬とはぜんぜん違う・・・と。その選手が第五陣で、ドイツに渡った「恵藤英雄君」でした。彼は三年の契約期間を終えても帰国せず、ドイツに残った人で、山口県の出身で国民体育大会の卓球の選手でした。恵藤君は私たちゲルゼンキルヘン仲間のドイツ訪問旅行では、ホテルの予約や現地での交流会でお世話になりました。面倒見の良い彼は定年後卓球の指導で生活していた。また、日本卓球選手団の世話を長年していて、今でも日本卓球協会との交流は続いていると聞いた。(数年前ドイツで逝去された)

言葉が話せるようになると、ドイツ人の家に下宿する人が多くなった。私の下宿生活は家族のように楽しい生活でした。日曜日には家族と協会にミサに行き、ドライブで観光地に行ったりした。家事をみんなで一斉に分担して行い、子供の勉強時には、私は奥さんのヘルガに子供と一緒にドイツ語の読み書きも教わった。今でも少し、ドイツ語が聞き取ることができるのもこのお蔭と思っている。

帰国後、家内を連れてポンペ家を訪問した。小さかった女の子は成人し、子供の頃からの夢だった理容師になっていた。主人のボルフカンクは炭鉱を辞め建設会社の技師、奥さんは看護師になり病院勤務でした。卓球仲間も訪ねて来た。12歳だったマリアンネは結婚し子供と来た。車椅子で来たゲルダ夫人、離婚して一人のマリス夫人、お互いに当時のことを懐かしんで夜遅くまで語り合った。

1999年5月5日に、ボルフカンクは67歳で肺がんで他界した。2001年の津軽三味線公演終了後、私は花束をもってヘルネ(Herne)の墓地を訪れた。墓地の一角に、青々とした芝生の中に“Pompe”の文字が刻まれた石碑が建っていた。深々と頭を下げ合掌した。私がドイツの鉱山の国家試験に合格した時、自分のことのように喜んでくれた本当の兄弟のような仲でした。



【鉱山試験合格を喜ぶポンペ氏】

2008年の正月、電話をかけても出ない。クリスマスの手紙を出しても返事が無い。不吉な予感が的中した、ヘルガは他界していた。娘のガブリエルからの手紙だった。ヘルガはタバコが好きで私が何度もやめるように説得していたのですが、ボルフカンクが亡くなってから、遺影に一人で居るうちに寂しくなり、テレビを見ながら、タバコを吸うようになったと娘からの話でした。彼女も肺がんでした。色々なことを教えてくれたドイツの兄弟姉妹。家庭を訪問するときの花の本数は奇数、赤い花は愛情を示し、主人のいる婦人には禁止、白い花は忌の意味で気をつけよ。日本的なあいまいなことはドイツでは嫌われる。ヤー(ja)、ナイン(nein)は、はっきりすべき、と教えてくれた人生の二人目のおっかさんに感謝している。

この人たちの他に **Wolfburg** のバーバラ・マーチンスさんもご主人を亡くし、一人で住んでいる。ドイツに行ったときは必ずお世話になる。孫の子供たちも懐いてくれる。ご主人は **VW** 社に勤め、私をドイツに残留させ **VW** 社に勤務させようとしたほど親身になってくれた家族です。

1960 年代ドイツ国内に数百人より日本人がいなかった時代、同じ敗戦国のアジアの小国、日本という国の若者をドイツの人々は暖かく迎えよく世話をくれた。日本人の勤勉さと、素直さが彼らに理解されたのかもしれない。ドイツの炭鉱で働きドイツ復興の手助けと日独親善に少しは貢献できたと自負している。逝去された多くのクンペル、心から感謝申し上げたい。

(続く)

5. 日本百名山 (連載)

1. 利尻岳 (1718 米) 利尻山(りしりざん) (1721m)
1. Rishiri-dake (1718 m) Rishiri-san (1721 m)

1-01

礼文島から眺めた夕方の利尻の美しく烈しい姿を、私は忘れることができない。海一つ距ててそれは立っていた。利尻富士と呼ばれる整った形よりも、むしろ鋭い岩のそそり立つ形で、それは立っていた。岩は黄金色に染められていた。

Es will mir nicht mehr aus dem Sinn gehen, dass die schöne und starke Gestalt des Berges „Rishiri“, zu dem ich in der Abenddämmerung von der Insel Rebun geblickt habe. Er steht über die Meerenge. Er ragt mehr schärfer wie eine Felsenmasse empor, als der Berg genannt „Rishiri-fuji“. Sein Fels ist goldfarben.

1-02

島全体が一つの山を形成し、しかもその高さが千七百米もあるような山は、日本には利尻岳以外にはない。九州の南にある屋久島もやはり全島が山で、二千米に近い標高を持っているけれど、それは八重山と呼ばれているように幾つもの峰が群立しているのであって、利尻岳のように島全体が一つの頂点に引きしぼられて天に向ってはいない。こんな見事(みごと)な海上の山は利尻岳だけである。

この立派な山が、我が国山岳書の古典である志賀重昂の『日本風景論』にも高頭式の『日本山岳志』にも出ていないことを、私は大変遺憾に思うが、それだけこの山の世に知られることが遅(おそ)かったのかもしれない。

Die ganze Insel bildet sich einen Berg, dazu ist er mit einer Höhe von 1.700 Metern. Keine andere Berge sind in Japan als Rishiri. Die Insel „Yakushima“ in süden von Kyushuh ist gekannt auch der ganze Berg und hat er nahe an 2.000 m Höhe. Der hat aber so viele Gipfel, wie genannt Yaeyama (acht Berge). Im Gegensatz zum Rishiri beschränken seine Gipfel sich nicht auf einen Punkt. Daher ist der Rishiri einzig der wunderbare Berg auf dem Meer. Es ist sehr bedauerlich, dass so schöner Berg in klassischen Werke nirgend zu finden ist, zum Beispiel, weder „Die Theorie von japanischen Landschaft“ (Nihon Fuukeiron) von Shigetaka Shiga noch „Das Dokument über die Berge in Japan“ (Nihon-Sangakushi) von Takatou Shoku. Der war vielleicht zu später, in der Welt bekannt zu sein.

1-03

私の眼にした最初の利尻岳紀行は、『山岳』第一年二号に載った牧野富太郎氏のそれである。明治三六年（1903年）八月のことで、この植物学者の一行は鴛(おし)泊(どまり)から登った。ほとんど道らしくもない道を辿って山中に二泊している。頂上には木造の小さな祠があったというから、土地の人は、すでに登っていたのであろう。紀行にはカタカナの植物の名がたくさん出てくる通り、北日本で最も種類に富み、リシリという文字が頭についた名の植物だけでも、十八種に及ぶそうである。

Der erste Bericht über den Rishiri, den ich gelesen habe, war die Reisebeschreibung von Botaniker Tomitaroh Makino. Der Bericht findet sich in der Zeitschrift namens „Sangaku“, die in der ersten Ausgabe Nr. 2. Seine Gruppe war zum August 1903 von „Oshidomari“ abgereist. Auf dem wie Wildwechsel gehend, hat sie zwei Nächte unter freiem Himmel übernachtet. Er sagte, dass ein klein Schrein aus Holz auf der Spitze sich gefunden habe. Daher war wahrscheinlich der Anwohner schon darauf gestiegen. In seinem Werk stehen viele Namen der Pflanze mit japanischer Schrift „katakana“. Weil dieses Gebiet die meist verschiedenartigen Pflanze in Nordjapan hat, soll es achtzehn Arten geben, deren Namen mit dem Präfix Rishiri sind.

1-04

利尻は噴火によって出来た円形の島で、中央にそびえた利尻岳が四周海ぎわまで裾を引いている。従って人の住んでいるのは海ぎわだけで、島を一周するバスが町や村をつないでいる。主な町は、杓形(くつかた)、鴛(おし)泊(どまり)、鬼(おに)脇(わき)、仙(せん)法師(ほうし)の四つで、どこからも、利尻のよく見えることは勿論である。大体富士型の山であるが、仰ぐ方向によって幾らか形が変わる。鬼脇と仙法師の中間の三日月沼あたりから見た姿が一番尖鋭で、それはまるで空を刺すような鋭い三角錐である。

Rishiri ist die runde Insel, die durch den Ausbruch sich gebildet hat. Die Lava floss weiter aus dem zentralen Gipfel mit allen Richtungen zum Ufer. Die Bewohnerschaft wohnt nur an der Küste und die Insel umkreisend, bindet der Bus die Orte. Die hauptsächlichen Städte sind vier: „Kutsugata“, „Oshidomari“, „Oniwaki“ und „Senbohshi“. Natürlich ist der Rishiri von jeder Richtung gut zu sehen. Obwohl seine Sicht ungefähr wie der Berg Fuji (72), ist sie etwas abhängig von der Richtung. Sie ist am schönsten aus der Gegend des „Mikazukinuma“ zwischen Oniwaki und Senbohshi, wie die scharf den Himmel stößende Pyramide.

1-05

北海道本島と遮断された海上の山だけあって、此処には蛇や蝮がないという。北海道の山に付きものの熊もいない。かつて対岸の天塩(てしお)に山火事があった時、難を逃れてこの島まで泳ぎ渡ってきた熊が一時棲みついたが、いつの間にか見えなくなったそうである。多分また古巣へ泳ぎ帰ったのであろう。

Wegen des Berges, der von der Hauptinsel Hokkaido abgeschnitten ist, soll weder Schlangen, Vipern, noch sogar Bären leben. Als der Waldbrand in jeseitigen Bezirk Teshio entstand, war ein Bär geschwommen in die Insel und hat gesiedelt in kuzem, danach soll er unbemerkt weggegangen sein.

Wahrscheinlich gang er nach Hause übers Meer.

1-06

鴛泊、鬼脇、杳形、からそれぞれ頂上へ登山路が通じている。一番古いのは牧野富太郎氏らの登った鴛泊道で、行程は長いが楽なので、今でも一番多く利用されている。反対側の鬼脇道は、距離が短く変化に富んでいるが、頂上近くで瘦せた岩尾根を辿る危険を冒さねばならない。

Von Oshidomari, Oniwaki, und Kutsugata führt jede Route zum Gipfel. Die Älteste ist von Oshidomari, wo Makino früher ging. Weil die Route lang aber leicht ist, geht man meistens noch jetzt darauf. Im Gegensatz hat Oniwaki kurze und wechselvolle Strecke, doch den sehr gefährigen und schmalen Bergrücken in der Nahe des Gipfels.

続く

事務局註：

深田勝弥会員は作家故深田久弥氏の甥という関係から名著「日本百名山」の独訳に挑戦されています。百名山の順番に従って掲載するのが常套ですが、第1回目は深田久弥氏の故郷である石川県にある白山から始めました。ここからは順番に1番の利尻岳から進めます。スペースの関係で「利尻岳」も2回に分割して掲載します。

6. デザイナー修行奮闘記 - 連載 12 (井上 晃良 記)

私の「鉄道デザイナー」への道

2つのホームステイ (続き)

語学学校の2コース目のホームステイを始めて1ヶ月半が過ぎた頃であろうか、ステイ先のご主人が転勤になることが決まった。そのため、奥さんは3人の子供達を1人でみる事になり、3コース目以降は残念ながら受け入れられないと言われたのである。私は色々な意味で今迄の自身が生活した環境と異なるステイを楽しみつつ、少しずつでも向上する自身のドイツ語能力に若干の確信を持ち始めてきていたが、再び新たなステイ先を見つけなければならなくなった。語学学校では地元で幾つものステイ先となる家庭を確保してあるので、見つけるのには苦労はなかったが、せっかく慣れて来たステイ先が終わりになる頃、私のドイツでの目的を知っていたご主人から、私がステイした記念に自宅の自動車の絵を描いて欲しいと言われ、久しぶりに絵を描く機会に恵まれたのである。但し、画材は全く持っていなかったため、必要最低限のみ近くの文具店で揃え、クルマを観察し、数日掛けてクルマを描き上げた。完成した絵を家族に見せると、ご主人は無言で数分間絵を眺め、そして私に「とても気に入った。どうもありがとう」と感謝を貰った。彼の言葉が出るまでの数分間の沈黙は、何かいたたまれない時間であったが、その一言でここにステイして良かったと感じたのである。

ゲーテで学んだ目的はドイツ語によるコミュニケーションが出来るようになることはもちろんであるが、それと共にまずは初級検定を合格することである。当時の私は丁度初級最後のクラスに居た事もあり、2コース目の最後に「外国人のためのドイツ語検定 (ZDaF)」と呼ばれる検定試験の準備をしなければならない。この試験は一次試験が語彙力や文法などの筆記試験で、それに合格すると2次試験である面接を受けることになる。この両方の総合点で合否が決まる。

私の場合、苦手は筆記であり、コミュニケーションはホームステイの効果もあって比較的面接試験には自信があったのだが、筆記試験で不合格であると面接試験を受験するチャンスすらない。長期戦を覚悟して取り組んでいる私も最初の関門であるこの試験は何とか合格したいもの。しかし、本気で取り組んでいなかったせいもあろう。中々合格することが出来ず、結局初めて受験した試験は見事に不合格。それでも3コース目は、中級クラスに上がって更に高度なドイツ語学習を始めることになったのである。

私にとってもう一つの問題であった新しいホームステイ先は、すぐに決まった。今度のステイ先は、やはり夫婦と2人の子供を持つ子育て中の家庭である。あと、小さな犬が1匹とネコが1匹。家は典型的なブレンダーハウスと呼ばれる長屋状の家であるが、間口は狭いものの奥が深く、地下から屋根裏部屋まであるので、広さはそこそこある。同居する子供達と言っても、成人した姉と高校生にあたる弟の兄弟で、家庭の中は比較的静かであり、前のステイ先とは全く異なる環境であった。家庭というのは、同じドイツ人でもこうも違うのかと思える程である。この家庭では以前にも日本人がステイしていたらしく、日本人である私には色々と気を遣ってくれた。ご主人がNゲージの鉄道模型のレイアウトを持って趣味にしていたのも私とは話があった...と言っても当時の私には、やはり語彙力がさほどなく、あまり話ができなかったのも確かであるが。

新しいステイ先では、今日本でも静かなブームであるクラインガルテン（小さな区画に小屋と畑のある市民農園）を持ち、自宅に庭がなくても土いじりが出来る。天気の良い日は、家族で出掛けお茶やケーキで午後のひとときを楽しんだりもする。最近では日本でもこのような楽しみ方をしている人もいるが、当時の私にはとても優雅に見えたものである。お金を掛け用意されているサービスを楽しむのではなく、自然に身に付いた余暇の過ごし方と言うべきであろうか？ドイツの長い冬はどんよりとした曇り空の日が長く続くので、春から秋に掛けての天気の良い日は少しでも太陽を浴びようとする思いが、夏の蒸し暑い環境にいる日本人とは根本的な楽しみが違うのであろうと思う。

また、学校のない休日には私が鉄道好きを知ってか、クルマで近くにある蒸気機関車の走る保存鉄道に乗り連れて行ってくれたりもした。そして私も居心地が良く、結局大学入学迄の半年間をここで過ごすことになったのである。

ここでは、私の目標である美術大学へのコンタクトもステイ先のホストファミリーは親身になって手伝ってくれ、何とか書類も揃え2月に行われる入学試験の準備も整う事が出来た。今思い返せば、言葉の不自由な国で何一つ自分の力では出来なかったように思う。ドイツに来て半年で美大の試験に合格できるのかどうかは未知数である。ただ、私が今迄やってきたことを全力でぶつけてみるしかない。そう思ったのである。

(続く)

(本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザイン EX 03』に連載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただいています。)

7. ドイツ音楽サロン報告 (事務局)

昨年より 8 月のドイツサロンを音楽版として独立させ、今年は第 2 回目の開催となりました。会場は毎月のドイツサロンの会場である陶豆屋さんではなく、前橋市中央公民館です。

今回の出演は、重野和男会員がデュッセルドルフ駐在時代に所属していた「デュッセルドルフ日本男声合唱団」のメンバーが日本帰国後も活動しているグループです。多くの団員が東京近辺から群馬県まで来てくれました。

まず立派なカラー版プログラムが参加者に配布されました。全体が三部構成となっており、第 1 部はゲーテ作詞の「ただ憧れを知る者だけが」をベートーベン・シューベルト・シューマン・チャイコフスキーの各作曲家が書いた曲を歌い比べるものです。解説があつてそれぞれの特徴を比較していただいたので納得して聴くことができました。



第 2 部は「ドイツ歌巡り」と題してまずライン川を出発すると、デュッセルドルフの歌が続きました。「昼はケー(Kö)でお買い物、夜は旧市街(Altstadt)で」アルトビアでしょうか。次はルール鉱工業地帯となります。ぐんま日独協会対馬副会長が国家プロジェクトの一員として派遣されたルール炭田。そこで働いていた仲間の OB 会である「グリュックアウフ会」とデュッセルドルフ日本男性合唱団のお付き合いが始まったのが 2004 年。それ以来、ともに祝う新年会で必ず歌う”Das Bergmannslied”(鉱夫の歌)が披露されました。そのグリュックアウフ会からも 2 名が参加してくれて大いに盛り上がりました。それからハンブルク・ベルリン・ミュンヘン・ハイデルベルクを経てラインに帰郷しました。お陰様で群馬県に居ながら、ゆったりと懐かしくドイツ各地を旅することができました。

さて最後の第 3 部は「みんなの知っているドイツの歌を一緒に歌いましょう」です。もう気分はドイツのビアホールです。会員のみなさんはほとんど車で来ていますので、ビールはグッと我慢。でもビールが無くても酔えるものですね。



約 60 名の参加者という大盛況の中で、素晴らしいひと時をありがとうございました。

8. 新規活動サークル紹介 (事務局)

ぐんま日独協会の活動の核となっているのが「ドイツサロン」で2008年6月から10年(120回)以上続いています。創立当時の会員の主体はお医者さんを中心とした集まりでしたが、今では会員もバラエティーに富んでおり、その興味の対象も広がっています。そのような環境からいくつかの活動サークルが誕生しています。

「クマさん作りの会」は2017年の「第7回ドイツフェスティバル in ぐんま」を機に形成されました。フェスティバル終了後も2年後のフェスティバルに備えて毎月最終木曜日に定期的に活動しています。いろいろな生地で、いろいろな形・色・大きさのクマさん作りにおしゃべりも楽しみながら挑戦をしています。出来上がったクマさん、一つ一つ表情も違ってとてもかわいいんです。その多くがドイツの友人へのお土産、施設の高齢者、孫たちへのプレゼンなどと手元から離れてそれぞれの場で活躍しています。テディベアの母国、ドイツへのお土産にも大変喜ばれている、なんてなんだか奇妙ですね。

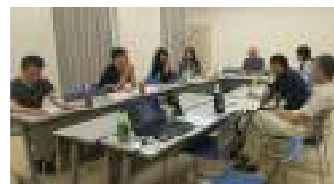


【ある日の活動メンバー】



【クマさん勢ぞろい】

「ドイツニュースを聞く会」(“Deutschkurse – Nachrichtenzirkel”)と「ドイツ映画を見る会」(“Deutschkurse – Filmzirkel”)は今年2月から始めた新鮮なサークルです。会員同士で、「誰が先生で誰が生徒」という関係ではなく、ワイワイガヤガヤ楽しみながらドイツ語の勉強、そしてニュースの背後にある諸事情を勉強しようという趣向です。1月・2月は「ニュース」で3月が「映画」、また4月・5月「ニュース」で6月が「映画」というサイクルで進めています。



【ある日の「ドイツ語ニュースを聞く会」の様子】

これまで扱ったニュースの題材は ①オルカーン被害 ②メルケル4選 ③ベルリンの新空港建設 ④トルコ大統領選挙と在独トルコ人 でした。

「映画」はこれまで ①「グッバイ レーニン」 ②「東ベルリンから来た女」(ドイツ語タイトル“Barbara”) ③「おじちゃんの里帰り」(9月予定) を取り上げました。基本的にジャンルを4分野に分けて①ナチ時代・東西再統一 ②現代ドイツ ③スポーツ(サッカー・山) ④芸術・歴史 を順番にやっていきます。日本語字幕も出ますので、ドイツ語が理解できなくても楽しめますよ。これからも乞うご期待!